

はじめに ～希望をもち正しく夢を追う～

『原発避難先でいじめ 中1生徒の手記公表』……これは2016年11月16日(水)の新聞記事の見出しです。生徒自身の当時の心情がつづられ、生徒自身が公開を決心したということです。記事は次の手記を掲載していました。

「ばいきんあつかいされて、ほうしゃのうだとおもっていつもつらかった。福島の人はいじめられるとおもった」「ばいしょう金あるだろと言われてむかつくし、ていこうできなかったこともくやしい」「いままでいろんなはなしをしてきたけどしんようしてくれなかった」「なんかいもせんせいに言おうとするとむしされた」「いままでなんかいも死のうとおもった。でも、しんさいでいっばい死んだからつらいけどぼくはいきるときめた」

私はやり場のない辛く悲しい思いでこの記事と向き合う中で、一人のある若者の言葉が脳裏をかすめました。『希望のない生活に夢なんかもてるか、夢なんかない』……横浜に自主避難してきたこの生徒が、自ら手記の公開に踏み切ったのには何らかの強い意思があったに違いありません。生きる決めた彼の深層には、これからの生活に希望のあることを信じ、たくましく生き抜く決意があったことを願わざるを得ません。

振り返ってみますと、私たちは子どもたちに、非常に安易に「夢」や「希望」という言葉を繰り返し遣っている気がします。今、子どもたちの生き方と係わらせて夢、希望について真剣に考える大切さが痛感されます。フランスの小説家であり詩人のルイ・アラゴン(1897~1982)は、幾つもの名言を残していますが、その中の一節に心を奪われます。

教えるとはともに希望を語ること。

学ぶとは心に誠実を刻むこと。

そして正しく夢を追えること。(下線部分はせん越ながら廣中)

彼の生きた時代背景と現代とは違うわけですが、現代の抱える課題を思うとき、この一節のもつ意味は現代に重なるものに思えてなりません。もし、いじめた側に希望のもてる生活があったら、誠実であることを心に刻み夢を想像し追うことができているなら、と考えてしまうからです。子どもたちを家庭、学校、地域社会全体で見守り育てるということは、子どもたちに希望をもって生活できる環境をそれぞれでカバーし、連携しながら整えることのように思います。その先には生き方を習得して正しいプロセスで夢を追う子どもたちの姿が想像できます。

ひょっとして、三者が以下のようなことを共通理解して、親も教師も地域の大人も、子どもたちのために何ができるかを考えていくなれば、子どもたちに「希望をもち正しく夢を追おう」と胸を張って言える大人になれるのではないでしょうか。

- ◇ 家庭には、温かで穏やかな日常がある、豊かなコミュニケーションがある。
- ◇ 学校には、自分を認めてくれる何かがある、心躍る何かがある。
- ◇ 地域には、明るい挨拶と笑顔がある、打ち解け合う帰属意識がある。

そんなことを思いつつ、青少年健全育成推進事業にご尽力いただいております皆様方に深く感謝申し上げます、本事業の更なる充実発展を衷心よりご祈念いたしまして結びとします。

平成29年2月

蒲郡市教育長 廣中達憲

も く じ

は じ め に

I	平成 28 年度	青少年健全育成地域活動推進事業	-----	1
II	平成 28 年度	青少年健全育成協議会・地域ふれあい活動	-----	2
1	大 塚 地 区		-----	3
2	三 谷 地 区		-----	7
3	蒲 郡 地 区		-----	11
4	中 部 地 区		-----	16
5	塩 津 地 区		-----	20
6	形 原 地 区		-----	27
7	西 浦 地 区		-----	35
	○健全育成協議会並びにふれあい活動のまとめ		-----	39
III	補 導 員 活 動		-----	40
IV	平成 28 年度	地域安全・青少年健全育成市民大会	-----	41
	○大 会 宣 言		-----	42
	○小学生・中学生・高校生の意見発表		-----	43
V	蒲郡市子ども・若者支援ネットワーク協議会の取組		-----	58

お わ り に